

晩年の江總

——「秋日遊昆明池」詩を手がかりに——

安藤信廣

隋の開皇十四（五九四）年、江總（五一九—）が江都に卒した。平靜な死である。だが、死の直前に記した「自敍」の中で、彼は次のように言う。

弱歲歸心釋教。（略）運善於心、行慈於物、頗知自勵。而不能蔬非、尙染塵勞。以此負愧平生耳。

己の人生は「愧」を負つたものだといふ述懐は、その死の平靜さとは裏腹に、彼の胸中に沈潜した重い苦惱を思わせる。「豔歌」の作者として著名なこの詩人の晩年にどのような内面的問題があつたのか、それを、「自敍」の暗示に基づきまた周邊の詩人——主に薛道衡（五四〇—六〇九）——との對比の中で、探つてみようと思う。

・元行恭（生没年未詳）という各々來歴を異にする三人の詩人が長安近郊なる昆明池に遊び、「秋日遊昆明池」と題する詩を一首ずつ制作した。（注二）

最初に薛道衡のうたう所を見よう。

灞陵因靜退 灞陵 靜退に因りて

靈沼暫徘徊 靈沼を暫く徘徊す

新船木蘭楫 新船は木蘭の楫

舊宇豫章材 舊宇は豫章の材

荷心宜露泣 荷心は露の泣るに宜く

竹徑重風來 竹徑は風の來るを重んず

魚潛疑刻石 魚潛みては刻石かと疑はれ

沙暗似沈灰 沙暗くして沈灰に似たり

琴逢鶴欲舞 琴は鶴の舞はんと欲るに逢ふ

酒遇菊花開 酒は菊花の開くに遇ふ

羈心與秋興 羈心と秋興と

陶然寄一杯 陶然として一杯に寄せん

二

恐らくは開皇十二（五九二）年九月九日、江總・薛道衡

「瀟陵」は長安の東の地。そこに私は靜かに退き暮して
 いるが故に、長安の西南なる「靈沼」即ち昆明池のあたり
 にたちもとおりつつあるのだ、と詩人は言う。かつて揚雄
 が「然後先置乎白楊之南、昆明靈沼之東。」と雄壯な天子
 の羽獵の開始を歌つたその場所、昆明池の景觀は、——し
 かし今それとは逆にものさびしく靜まりかえつた世界とし
 て描かれる。魚は黒々と水中に潛み、その姿は刻まれた石
 のように見え、沙は暗く水底にしずまり、あたかも沈んだ
 灰のように見える。「魚潛疑刻石、沙暗似沈灰」——彼の目
 は昆明池の自然の中に、重く暗い要素を見出そうとするか
 のようである。そうした視點の展開の後に、「羈心與秋興、
 陶然寄一杯」——たびのもの思い「羈心」と秋の感興「秋
 興」とを、陶然と酔つた私の一杯の酒中に寄せよう、と詩
 は結ばれる。

「秋興」の語が潘岳の「秋興」賦をふまえているかもしれ
 ないことはしばらく措くとしても、薛道衡のいう「羈心」
 即ち「羈旅の心」とは何だらうか。(注四)彼が瀟陵に住んでいな
 がら、昆明池に遊んだことを「羈旅」と言えよう筈はな
 い。しかもこの「羈心」という語は、彼の感覺の働く方向
 を規定していると言つてよい。彼の感覺が微細なものに向
 かつて鋭敏であり、かつ暗く重い要素に對して緊張してい

るのは彼の肉體が「羈旅」にあり、そのことによつて彼の
 魂がおののいてゐるからである。——その問題を疑問と
 して残しつつ、次に元行恭の作を見よう。

旅客傷羈遠 旅客 羈の遠きを傷み
 樽酒慰登臨 樽酒もて登臨を慰さむ

池鯨隱舊石 池鯨 舊石を隱し

岸菊聚新金 岸菊 新金を聚む

陣低雲色近 陣のごと低くして雲色近く

行高鴈影深 行高くして鴈影深し

欵荷瀉圓露 欵荷 圓露を瀉ぎ

臥柳橫清陰 臥柳 清陰を横たふ

衣共秋風冷 衣は秋風と共に冷え

心學古灰沈 心は古灰に學ひて沈む

還似無人處 還似 無人處

幽蘭入雅琴 幽蘭の雅琴に入るに似たり

既に薛道衡の作に於いて疑問として提示したものが、再
 び冒頭から登場する。「旅客傷羈遠」たびびとである私は、
 己が羈旅のあまりに遠きに至つたことを傷む、と。「樽酒
 慰登臨」というのは、この日が九月九日、重陽の節句だつ
 たことを示すであらう。かつて多くの親しい人々とともに
 して來た登臨を、樽酒もて慰さめつつも私は孤獨の中です

るのだ。——その「羈遠」を傷む「旅客」なる私の目に映る景色は、やはりあくまでもひそやかにものさびしい。「衣共秋風冷、心學古灰沈」わが衣は秋風とともに冷え、わが心は燃えつきた灰の如く重く沈む。宴の琴の音も、もはや華やかなものではなく危険な程の明澄さの中に吸い込まれて行く。「還似無人處、幽蘭入雅琴」と。——詩人の精神は、一方で自己の内面へ重く沈み込み、自己の内面にわだかまる何ものかを抉出しようとするかのようだが、ただだからこそ彼は彼の外面に向かつて、それに拮抗し得るものを見出そうとする。そうした精神の指向の基底にあるものは、またしても「羈旅」という言葉で表現される所のものである。最初に提示された「旅客羈遠」の句が、一首全體の基調となつてゐることは明らかだろ。ここでも重要な役割を果たす「羈旅」とは何であつたのか。再びそれを疑問として保留しながら、江總の作を見てみよう。

江總は次のように歌う。

靈沼蕭條望 靈沼 蕭條として望み

遊人意緒多 遊人 意緒多し

終南雲影落 終南に雲影落ち

渭北雨聲過 渭北に雨聲過りぬ

蟬噪金堤柳 蟬は金堤の柳に噪き

鶯飲石鯨波 鶯は石鯨の波を飲む

珠來照似月 珠來 照すこと月に似

織處寫成河 織處 寫きて河を成す

此時臨水歎 此時の時 水に臨みて歎く

非復採蓮歌 復た採蓮の歌にあらざるを

「靈沼」即ち昆明池のあたりの景色は「蕭條」たるものとして私の目にはうつる。それを望む私は「遊人」即ちたびびとであり、たびびとである私には思うことどもが亂れた糸の緒のように多くある。前二者の作品に共通した疑問——「羈旅」とは何であるかという疑問は、三度ここで繰返されたと言わなければならぬ。同様に、江總の視點も前二者に共通している。薛道衡・元行恭と同じく、江總の精神は、微細でいささか不氣味な美に對してある異様な緊張をしているかのようである。そうした描寫の後に——かくして、いまこの時にあたり、私は水に臨んで歎くのだ、耳に觸れる音楽があつたか、私はいま「採蓮歌」ではないことを——「此時臨水歎、非復採蓮歌」と一首は結ばれる。

三

江總の作の「此時臨水歎、非復採蓮歌」という句は、三度繰返された「羈旅」とは何かという疑問に、具體的な解

答を與えてくれるもののように私には思われる。——江總等が「羈旅」のイメージを通じて描こうとしたもの、それは、亡國者としての自己の姿だつたのではなかつたか。

「採蓮歌」とは、梁の武帝蕭衍の作と傳えられる江南の歌曲である。ここ長安郊外の昆明池で、暮年のせまつた一人の詩人が、江南の歌曲をきけない歎きをことさらにうたうのは何故か。それは、彼が本來は江南の人だつたことを示し、従つて彼の「羈旅」は昆明池に遊んだことを指すのではなく、北地で送つていた歲月の全てを指すのだということと同時に示す。そして、江總が江南を離れ長安に「羈旅」した理由は唯一つ、「亡國」であつた。

江總、字は總持。濟陽・考城の人である。梁の天監十八年、紉の子として生まれ、隋の開皇十四年、七十六才で生涯を閉じた。江總の舊國は、南朝の最後の王朝なる陳。開皇九（五八九）年、隋によって陳が滅された時、彼は尙書令の地位にあつた。もとより陳國滅亡の最高責任者の一人であることを、免れない。陳の滅亡により、彼は他の數多くの人士とともに隋の主都長安に強制的に連行される。彼が「秋日遊昆明池」詩に於いて自己を「遊人」と表現し、また「採蓮歌」をきけない歎きをうたうのは、まさにこのことを指すのだと考へなければならぬ。

それでは一方、薛道衡と元行恭はどうであろうか。彼等の出身は、北朝の一、北齊であつた。それが隋の前身である北周に併呑された時（五七六）、薛道衡は中書侍郎、元行恭は中書舍人、そして兩者はともに文林館待詔を兼ねていた。彼等もまた北齊の都都から、はるかな輿地の長安に強制的に連行された過去の持ち主である。彼等にとつての「羈旅」も、實はそのことを指すのであつただらう。それは、亡國にまつわる無数の悲惨な體驗と感慨をその後にはひきずつた文學的イメージだと考へないわけにはいかない。

だが、「羈旅」という文學的イメージが示す所のものは、より重層的だつたのだと、私は思う。それは、彼等が單に亡國者であるだけでなく、その上、異朝に出仕した者だということをも示しているであろう。北周の庾信（五一三—五八二）以來、「羈旅」の語はそのような重層性を持つた言葉として用いられている。庾信が「擬詠懷」詩（其四）に於いて「離宮延子產、羈旅（注六）接陳完」と言う時、その「羈旅」は明らかに、陳完のように異朝に仕えて生きる自身の生を示しているのである。江總等が、近い先人である庾信を意識して、異朝に仕えた自分自身を表現するために「羈旅」のイメージを用いたことは明らかだらう。事實、隋朝にあつて、江總は上開府儀同三司、薛道衡は内史侍郎・上

開府儀同三司・襄州總管にまで至つてゐる。(註七)

その異朝への出仕を、彼等ほどのようにとらえていたか。——江總の「哭魯廣達」詩は次のように述べる。

黃泉雖抱恨 黃泉 恨みを抱くと雖も

白日自流名 白日 自ら名を流す

悲君感義死 君が義に感じて死し

不作負恩生 恩に負くのを生を作さざるを悲しむ

黃泉の國にあつて君は深い恨みを抱いておられようが、白日の下のこの世に、おのずからなる名を流しておられる。君が義に感憤して亡くなり、國恩に負き敵に降つて生きのびようとしなかつたことを、私は悲しく思い起こすのである。——魯廣達は陳の名將。陳の滅亡に際して、自陣にふみとどまつて最後まで戦つたほとんど唯一の軍人だつたという。詩は、「陳書」卷三十一、魯廣達傳の次の記事の後に記されている。

廣達愴本朝(陳)淪覆、遭疾不治、尋以憤慨卒。時年五十九。尚書令江總撫極慟哭、乃命筆題其棺頭、爲詩曰、云々。

詩意は一見して明らかであろう。そしてこの作品の中に、江總等にとつての「羈旅」の意味を、その最も本質的な位相に於いて、しかも最も象徴的な姿で見出すことがで

きると私は考える。——江總等にとつて「羈旅」とは、「亡國」とそれにひきつづく異郷への旅を意味するだけでなく、さらには、異朝への出仕——それは事實上半強制的なものだつたであろうが——という倫理的負い目に彼等が深く傷つけられて生きていることを、物語るのである。江總が魯廣達を哭した時、その胸中を「恩に負くのを生を作」している他ならぬ自分自身への痛恨がかけめぐつていたことはまちがいない。最初に觸れた「自斃」の中で、江總が「以此負愧平生耳」と述べたその「愧」とは、明らかにこの痛恨を中核に持った感慨であろう。そして「秋日遊昆明池」詩で江總が「靈沼蕭條望」という時の「蕭條」とした親點、元行恭が「心學古灰沈」という時の暗く傷ついた心情も、この倫理的負い目によるのだと考えなければならない。

四

倫理的負い目——それは、自己の存在の倫理的價值が崩壊した、という意識に基づく。王朝體制の下に生まれ生きた彼等にとつて、言うまでもなくそれは深刻な挫折だつたであろう。だが、より重要な問題は、彼等がその倫理的挫折の位置にとどまつてはいなかつたことであり、むしろそれを乗り越えて行く精神の強韌さを持つていたことだつた。

「羈旅」という文學的イメージによつて示される、自己存在の倫理的價値の崩壊——それにどのように立ち向かい克服して行くかという問題認識が、恐らくは江總と薛道衡の精神の中に共通してあつたであらう。それは、彼等の内面的活動全體を成立させて行く基底——の少くとも重要な部分——になつていたのではないだろうか。二人の思想と文學、あるいは生死の有り様の外見上の隔絶にもかかわらず、彼等はこの共通する精神的基底を各々の内面に深く持っていたのではなかつたか。

薛道衡は、誠實な政治家に徹して生きることによつて、自己の存在の價値を再構築しようとした人である。人生の選擇がのつびきならない倫理的要請によるものだつたために、彼の政治理念は非常に先鋭な形をとり、政治家としての姿勢も厳しいものとなつて行つた。それが禍いして、彼は後に煬帝の政治を批判したかどで縊り殺されることにな(注)る。彼の政治的で理念的な死は、彼の「羈旅」によつて既に準備されていたのだと言ふことができるであらう。

だが、自己の生の意味を峻厳なまでに筋道立てて再建しようとしたこの精神は、そうするためにこそ、己はかつて倫理性を喪失した存在だという自己認識を放棄せず、むしろそれをたえず確認しようとしたかのよりに思われる。

「敬酬楊僕射山齋獨坐」詩にはいう。

相望山河近	相望めば山河近く
相思朝夕勞	相思ひて朝夕勞す
龍門竹箭急	龍門 竹箭急に
華岳蓮花高	華岳 蓮花高し
岳高嶂重疊	岳高くして嶂重疊し
鳥道風煙接	鳥道 風煙接す
遙原樹若薺	遙原 樹薺の若く
遠水舟如葉	遠水 舟葉の如し
葉舟且且浮	葉舟 且且浮かび
驚波夜夜流	驚波 夜夜流る
露寒洲渚白	露寒くして洲渚白く
月冷函關秋	月冷やかにして函關秋なり
秋夜清風發	秋夜 清風發し
彈琴即鑑月	彈琴して即ち月を鑑る
雖非莊鳥歌	莊鳥の歌にあらずと雖も
吟詠常思越	吟詠 常に越を思ふ

詩題の楊僕射とは、尙書左僕射の地位にあつた楊素を言う。仁壽年間、薛道衡が襄州總管として襄陽にあつた時、楊素に贈つた詩である。「莊鳥」は戰國越の人。楚に仕えて富貴を得、しかも病に伏すに及んで故國を思ふあまり越

(注九)

聲したという。「雖非莊鳥歌、吟詠常思越」という句は、故國を喪失した薛道衡自身の奥深い苦惱を表白しているのである。「秋夜清風發、彈琴即鑑月」という明らかに阮籍の「詠懷」詩を意識した句も、彼の精神がその苦惱の中でとぎすまされていることを示していよう。かつて負つた己の倫理的傷を見つめつづけるこころした視點こそが、薛道衡の峻厳な生き方と理念とを成立させて行つたのだと、私は思う。

五

薛道衡が誠實な政治家として生きることによつて傷を昇華しようとしたのであるならば、むしろ江總は、文學によつてその倫理的傷の深さと重さをとらえきることの中に残された生の課題を見出し、また可能ならばその上に自己の生の意味を再建しようとしたのではなかつたか。

「別哀昌州」詩一首は次のように言う。

河梁望隴頭	河梁	隴頭を望み
分手路悠悠	手	分てば路悠悠
徂年若驚電	徂年	驚電の若く
別日欲成秋	別日	秋ならんと欲す
黃鶴飛飛遠	黃鶴	飛び飛びて遠ざかり
青山去去愁	青山	去き去きて愁ふ

不言雲雨散 雲雨散じて

更似東西流 更に東西に流るるに似たりと言はじ(其

一)

題に言う「哀昌州」とは、かつて陳の尙書僕射だつた袁憲を指す。彼も陳の滅亡により隋に入つた人である。「資治通鑑」卷一百七十七、隋文帝開皇九年四月の條に、「上嘉袁憲雅操、下詔、以爲江表稱首、授昌州刺史。」とある。詩は、その袁憲が昌州に赴任する際の制作だらう。全體は、「文選」卷二十九に載せる李陵・蘇武詩の世界を下敷きにしている。「河梁望隴頭、分手路悠悠」という冒頭の句は、李陵作とされる詩の「攜手上河梁、遊子暮何之」をふまえること、明らかである。江總と袁憲の別れ、それは、そのかみ胡の地に捕えられ出會いそして別れた李陵と蘇武の別れに擬せられる。最後の二句にはふくみがある。「雲雨」とは、彼等二人を別れにまで至らせた動亂、即ち彼等二人がともに體驗して來た舊國の滅亡を、暗に指すのではなかつたか。その餘燼のさめやらぬ今、我等が「東西に流」れる水のように再會できない別れを別れようとしてゐるとは、言うまい。

客子數途窮 客子 途の窮まれるを歎く

此別異西東 此の別れ西東を異にす

關山嗟墜葉 關山 墜葉を嗟き

歧路悞征蓬 歧路 征蓬を悞む

別鶴聲聲遠 別鶴 聲聲遠ざかり

愁雲處處同 愁雲 處處同しからん(其二)

旅人である我々は途の行きどまりになつたことを歎いていたが、しかもその二人がいままさにここに別れ、西と東に所在を異にしようとしている。關所のある山に墜葉を嗟き、わかれ道にさしかかつては萬里をさすらう蓬のような各々の身の上をあわれに思う。別れ行く鶴が一聲一聲遠ざかるように、我々は遠く離れて行く。だがどれほど離れていようとも、各々が見る雲に愁いの色が漂うであろうことは同じに違いないのだ。——ここに言う「客子」は、旅立つ衰憲のみ指すのではない。それは自己をも含んだ表現であろう。途の窮まつたことを歎く客子という時、恐らくそれは窮途に慟哭したという阮籍の悲嘆を悲嘆している自分達を指す。あるいはこの句は、「漢書」卷五十四蘇武傳に李陵の作として載せられる「別歌」の、「路窮絶兮矢刃摧、士衆滅兮名已墮」によるかもしれない。其一が李陵と蘇武の別れに擬したものだつたことを思えば、その可能性も考えられよう。しかしそうであれば一層、「客子」は、異民族に仕えて心に傷を負いつつ生き「名已に墮」ちた所

の江總自身だつたということになる。

「客子歎途窮」という句が李陵の作をふまえるのか阮籍の故事をふまえるのかは決め難いが、いずれにしても「羈旅」のはじまつた當初から、江總が自己の精神的傷を文學の中に照射し位置付けようとしていたことは明らかである。

同様のことは「遇長安使寄裴尙書」詩についても言える。

傳聞合浦葉 傳へ聞く 合浦の葉は

遠向洛陽飛 遠く洛陽に向かひて飛ぶと

北風尙嘶馬 北風に尙ほ嘶馬あり

南冠獨不歸 南冠して獨り歸らず

去雲目徒送 去雲 目徒らに送り

離琴手自揮 離琴 手自ら揮ふ

秋蓬失處所 秋蓬 處所を失ふ

春草屢芳菲 春草 屢々芳菲あり

太息關山月 太息す關山の月

風塵客子衣 風塵 客子の衣

詩題の裴尙書とは、裴忌を指すであろう。裴忌は陳の都官尙書だつた人であり、江總と同年、羈旅の生涯を長安で終えた。

「南冠獨不歸」とは、南冠して晉に捕えられた春秋楚の

鍾儀を(注十)言う。そしてそれが自分自身を指すこと、言うまでもない。舊國の冠をつけて獨り歸らぬ己の胸中を去來するものは、「處所」を失なつた「秋蓬」の如き思いである。

「處所」を失つたがために新たなそれを見出そうとする「秋蓬」のような「客子」——これが江總自身の描いた自己像だつた。ここにも、自己の精神的傷を文學に投射し位置付けようとする彼の試みを見ることができよう。言い換えればそれは、文學的形象によつて自己の傷の本質をとらえようとする營みであり、その營みの奥底には、どのような人間像が自分等の共通に傷ついた傷を克服し得、その全的な重みを受けとめ得るのかという問いが、横たわつていたであらう。

江總の問題認識は大きな展開の可能性をはらんでいたと、私は思う。「贈賀左丞蕭舍人」詩の中で、彼は(注十一)言う。

黃河分太史 黃河 太史に分れんとし

一曲悲千里 一曲 千里を悲しむ

海内平生親 海内 平生の親たりしが

中朝流寓士 中朝 流寓の士となれり

痛哉憫梁祚 痛ましい哉 梁祚を憫む

于焉三十祀 ここに三十祀なり

鍾儀繫不歸 鍾儀 繫がれて歸らず

盛憲悲何已 盛憲 悲しむこと何ぞ已まん

隴頭心斷絶 隴頭 心斷絶す

爾爲參生死 爾かくのごと爲くして生死まじに參はれり

「太史」とは、今分れようとしている賀・蕭の二人を指すであらう。かなでられる音曲に、私は別れの千里なるを悲しむのである。かつて海内の何處にあつても親屬なだと考えていた我々が、いまではこの中國の何處に行つても流寓の士となつてしまつた。「梁祚」は「陳祚」というのをはばかつたのだらう。實際の梁祚は五十七祀、陳祚は三十祀。我等の舊國陳が、三十餘年で滅亡に至つたのを私は痛恨の思いで憫む。そして再び「鍾儀」が登場する。楚人鍾儀は、南冠して晉に捕えられたと言うが、そのように私は故郷に歸られずにいる。三國吳の盛憲は孫權に害されたと言うが、そのように私は絶望的な情況の中にあり、悲嘆の已む時などありはしない。隴頭山を望みつつ心は千々に斷絶する。このような境遇のために、私は人の生死という問題にすらたちまじわるのだ。——「爾爲參生死」とは、ひきさかれた彼の境遇が、彼をつき動かして廣く、かつ重く、人の生死という問題にすら關わらせるといふことだらうか。そしてそうであるならば、江總の意識には、生き死にに關わる問題を自己に提示しつづける存在として自己の

「流寓」が、またそれによつて疼きつづける傷が、あつたのである。江總は自己を「流寓士」と規定し、舊國楚の冠をつけて晉の虜因となつた「鍾儀」——「繫かれて歸ら」ざる「鍾儀」として押し出そうとしている。この「流寓」のイメージが「羈旅」のイメージに共通することは明らかであろう。そしてこの「流寓」または「羈旅」こそが、彼を人間の最も重々しい問題、「生死」の問題にまで關わせる力だつた、少くとも彼自身はそのような方向に位置付けようとしていた——「爾爲參生死」という句は、そう理解できるのではなからうか。江總は、「羈旅」「流寓」の倫理的傷をむしろ機軸にして、人間の様々な問題に關わつて行くこととしたのだと、私は思う。かつて陳の宮廷サロンの詩人だつた彼は、自己への本質的な疑念や批判を持たない存在であつた。^(註十二)だが、今や「羈旅」の傷は自己の倫理性への深刻な反省を強いたであらうし、その傷を位置付け乗り越えようとする努力は、自身の文學的視點を大きく變化させ深めて行つたに違いない。

恐らくは死の前年、開皇十三年の秋か冬に江總は長安を離れ、故郷に歸つたらしい。そしてその翌年の春、「南還尋草市宅」詩を制作したもののようである。彼の死に最も近いであらうこの作品は、次のように歌う。

紅顏辭鞏洛	紅顏	鞏洛を辭し
白首入鞏轅	白首	鞏轅に入る
乘春行故里	春に乗じて	故里を行き
徐步采芳蓀	徐歩して	芳蓀を采る
逕毀悲求仲	逕毀たれて	求仲を悲しみ
林殘憶巨源	林殘なはれて	巨源を憶ふ
見桐猶識井	桐を見て	猶ほ井を識り
看柳尙知門	柳を看て	尙ほ門を知る
花落空難遍	花落ちて	空難きこと難く
鶯啼靜易諠	鶯啼きて	靜諠 <small>かまひず</small> しくなり易し
無人訪語默	人	語默を訪ふ無く
何處敍寒溫	何の處にか	寒溫を敍せん
百年獨如此	百年	獨り此くの如し
傷心豈復論	傷心	豈復た論ぜんや

鞏・洛はともに河南の地。しばしば都城の地だつた。「鞏轅」もまた河南の山名。全てここでは借りて江南の金陵付近を言う。江總の舊宅は、陳の舊都建康（金陵）郊外にあつた。そこを紅顏もて辭したというのは誇張だが、白首もて歸り入るといふのは事實であらう。もはやそこには舊知の者はなく、逕と林の毀残した様を見るばかりである。庭は、見覚えのある桐や柳の木によつて井戸や門の所

在をうかがわねばならない程荒れはててしまつた。そのしんと静まりかえつた様は、わずかに花びらが落ち鶯が啼いた時だけ空しさと静寂とがやぶられる、という程なのだ。誰一人私を尋ね来る人としてなく、また誰一人私が尋ねるべき人もない。これからも生きてある限り永久に、私はこのようにただ一人孤獨に耐えて日々を送るのである。傷ついた私の心など、いまさうどうして論ずる事があろうか。

「百年」とは、生き續ける限りを意味する。そして「傷心」は、彼の亡國者としての悲涼と倫理的な負い目を指す。死を目前にしたこの詩人が「傷心豈復論」と言つたという事實、それはかつて負つた倫理的傷の深さを示すと同時に、傷を負つた人間の精神が、それでもなおいかに強靱であり得るのかということを示している。いや江總にあつては、むしろ傷を負つたからこそ精神の強靱さが刻み出されて來たと言うべきなのだ。彼が自己の傷の位置付けを文學によつて執拗に試みつづけた軌跡は、そのまま彼の精神が自己を強靱な主體に脱皮させて行く過程であつた。江總が己の傷を、李陵の、阮籍の、あるいは鍾儀の内面と對比し、それらと均しい本質を持つものと位置付けて來た過程——それは、ここに至つて大きな意味を持つ。彼等は皆、苛酷な現實に深く傷つけられながらそれでもなお己の精神の誠

實さを失わなかつた人々である。むしろ、現實の苛酷な打撃の中でこそ、またそれと厳しく對峙したからこそ、かえつて自己の誠實さを強く育てた人々である。江總が自己の「傷心」の全體像を見据えようとした試みは結局、これらの人々の内面を自分の傷にひきつけ、とらえ直して行く過程だつたのだ。

明らかにこの詩に於て、倫理的傷は論理の形で癒されてはいない。ところが彼はその癒されぬ傷に文學の場で對峙することから人間存在の本質的意味に接近し得たのである、その中に不幸な——ほとんど逆説的な——あり方ではあるが、確かに生き續けている人間の精神の強靱さを見出したのだらう。「百年獨如此、傷心豈復論」という言葉は、死の直前に到達した彼の文學的結論の、こうした重層性を示すのではなからうか。

六

南北兩朝の均衡が崩れ隋帝國が成立して行く激動の時代の波濤をあびて、晩年の江總は、自己の倫理的傷にこだわりの、傷を負つた自己を文學の中に照射しつづけることによつて自身を文學者として再創造しようとしたのだと、私は思う。そして彼が執拗にその試みを續け得たのは、「秋日

遊昆明池」詩が象徴的に示すように、同様の傷を負つた詩人達の集團が背景に存在していた事に一因を持つだろう。相繼いで滅亡しつゝには隋によつて統合されて行つた梁・北齊・陳等の王朝の遺臣である詩人達——「羈旅」への異なる執着をほぼ共通に示す彼等は、何がしか江總と共通する文學的試みをしたように見える。彼等はその營みを通じて、文學と人間及び時代の現實との重い關わり——六朝末期には極めて希薄になつていたそれ——を回復する道に踏み出し、そのような形で唐代文學を準備して行つたのであるまいか。晩年の江總の文學は、そうした潮流の中から生まれ出た試みだつたように、私には思われる。

(東京學藝大學附屬高校教諭)

(注一) 明人張溥は、その「江令君集」題辭の中で、江總の文學について「豔歌側篇、傳誦禁庭。」と述べている。

(注二) 三つの作品は題名を同じくし(「文苑英華」による。但し元行恭の作のみは「秋遊昆明池」となつている。)語彙に重なる部分を持ち、發想と表現に共通する要素を持つてゐることから、同時の競作であることが推定できる。また江總の作品だけは十句だが、元來は十二句で他の作と同じだつたと考えられる(注五參照)。そうであれば、句數の等しい事も同時の競作とする論據に加えられよう。また、薛道衡が詩中で自己の状態を「靜退」と表現していることから、開皇十二年、彼が免官されてゐた時期にこの競作は爲されたと考えることができる。

(注三) 揚雄「羽獵賦」。この部分の李善注に「三秦記曰、昆明池中、有靈沼神池。」とある。

(注四) 潘岳「秋興賦」に「夫送歸懷慕徒之戀兮、遠行有羈旅之憤。」とあり、薛道衡はこれをふまえてゐるのである。

(注五) 「此時臨水歎、非復探蓮歌」という句は、この前に今實際にきこえている音曲についての句が存在していたことを思わせる。元來は十二句であつたこの作品からその部分の二句が脱落して傳わつたと考えることができるのではなからうか。

(注六) 左傳莊公二十年に、「陳公子完奔齊。齊公使敬仲(陳完)爲卿。辭曰、羈旅之臣。」とある。

(注七) 元行恭も、尙書郎に至つてゐる。「北齊書」卷三十八元文遙傳)

(注八) 煬帝に上つた「高祖文皇帝頌」の中で、あるべき帝王像を「而留心政術、垂神聽覽、早朝晏罷、廢寢忘食、憂百姓未安、懼一物之失所。」等と述べ、これが煬帝の怒りをかう直接の原因になつたという。

(注九) 「史記」陳診傳に、「越人莊舄、仕楚而病。(略)使人聽之、猶尚越聲。」とある。

(注十) 左傳成公九年に、「晉侯觀于軍府、見鍾儀問之曰、南冠而縶者誰也。有司對曰、鄭人所獻楚囚也。」とある。

(注十一) 全體は四十句の長詩で、ここに引いたのはその十一句から二十句まで。

(注十二) 「陳書」卷二十七、江總傳に、「能屬文、於五言七言尤善。然傷於浮豔、故爲後主所愛幸。(略)當時謂之狎客。」とある。